

令和6年度 学校経営報告

東京都立八王子特別支援学校長
野口 幹人

はじめに

本校は2年間の休校期間を経て令和4年に中学部1年生までの在籍児童・生徒での再開となり、学年が進行して今年度が学校として完成形となった。

今年度は中学部3年生まで学年がそろったことで、小5・6年の移動教室、中学部1年生の宿泊防災訓練、中学部2年の移動教室、中学部3年の修学旅行を計画し、本校で計画していた宿泊行事を、泊を減らさずに安全に実施することができた。また、距離を保って実施していた小学部4年生までの相撲交流では、取組をしたり、完全に分けて実施していた学校間交流では合同のチームを作ってゲームを行ったりするなど、交流を実施する目的を達成することができた。

今年度中学部3年生は、1年生時から系統立てて取り組んできた進路学習で、都立八王子西特別支援学校との連携により、高等部での職業教育の一端に触れ、学習のイメージをもつことができた。本校の長い歴史の中で初めて別の高等部設置校に進学する。生徒が見通しをもって進学することができるように、小学部から（小学部4年生）都立八王子西特別支援学校との交流する機会をもち、連携を強めていきたい。以下令和6年度の学校経営結果を報告する。

1 今年度の取組目標等に関する自己評価

(1)【学校運営】

昨年度は主幹教諭が2名であったが、今年度は主幹教諭が5名配置され、小学部、中学部、教務主任、生活指導主任以外に、研究研修部に主幹教諭を置き、組織的な運営を心掛けた。2年間個人研究を行ってきたが、今年度は中学部3年生まで揃ったことで学校の研究テーマを設定し、学校縦割りの研究活動を行った。初めての試みであるため、主幹教諭が5名になったことをプラスに捉え、5グループにそれぞれ担当主幹を置き、進行管理を行わせた。個人研究からグループ研究に移行し、グループ研究の進め方を教員が体感することで、教員同士で研究対象児童について指導の方向性を確認し合い、仮説を検証し、結論付けるところまで導くことができ、教員全員で成果に至ることができた。

取組目標	取組結果	自己評価
学部運営週1回、学年会週1回、分掌部会月1回	計画通り実施	A
一人一回研究授業	計画通り実施。対象教員全員が研究授業を実施。校長としてすべての授業を観察し、助言を行った。若手教員及び10年目の中堅教員について年3回の研究授業を義務化されており、3回とも授業観察を行い、助言が生かされている授業改善を確認できた。	A
ヒヤリハット、事故、児童・生徒の体調の変化が管理職まで即報告が上がる体制を強化する。	首から上の大きなけがはゼロを達成することができた。また、体調不良者が出た場合は、保健室から管理職まで即連絡が上がる体制が確立している。	A
学校評価のオンライン集計	Google Formでの学校評価を実施し、3年目になるが、保護者向けのアンケート回収率は90%以上を維持している。	A

サービス事故ゼロの取組	サービス事故防止研修年3回実施、クリーンデスクの言葉掛けと確認等により、校内で発生したサービス事故はゼロであった。	A
経営企画室と連携した円滑な予算執行	予算執行率 95.6%、そのうちセンター執行率は 75.7%であった。	A

(2) 【学習指導】

学校の使命は「子どもたちに良い授業を提供すること」「良い授業を提供できる教師を育成すること」だと考えており、そのための取組を進めた。本校は児童・生徒数が119名と少ないことを利点として、児童・生徒全員の抽出型アセスメントを実施している。教員は担当児童・生徒のアセスメントの事前資料を作成し、放課後カンファレンスを行っている。加えて、教員一人当たり1回の外部専門員からの授業観察、一人1回研究授業の取組における管理職等の授業観察など、教員が自分の指導に対し助言を得る機会を多く確保している。加えて今年度から「若手教員を取りこぼさない寄り添った支援」のために、授業アドバイザーを外部専門員に加え、初任、2年次の教員を主に支援していただいている。管理職は今年度も教員全員の授業観察を行い助言した。年次研修者については年3回の研究授業観察を行い、継続して指導を行った。

近年の教員採用試験の倍率低下が現場での若手教員の育成が課題となっており、本校では、上記取組に加え、市販教材を購入し、発達段階表ごとに分類、整理し、アセスメントのカンファレンスに児童・生徒への具体的な活用法を外部専門員から助言を受けることで、一から教材を作らなくてもまずは市販教材で指導を行えるようにした。何度か取り組む中で、児童・生徒の取り組み方を把握してから個別的に改良を加えて自作教材を作るなど教員の発想力を促すことに市販教材を活用できた。来年度も今年度と同数程度の初任者が配置されている。継続した指導を組織的に行っていきたい。

取組目標	取組結果	自己評価
コミュニケーションブックを活用した児童・生徒が「分かって動く」ための方策の構築	本校で大切にしている「言葉の表出」を促すコミュニケーションブックの活用について、今年度も年度当初に研修を組み、研修を行った。活用できる教員が増えることでコミュニケーションブックの活用がさらに進んだ。	A
根拠に基づく指導	外部専門員の週出型アセスメントについて児童・生徒全員が受けるために、全教員が必ず事前シートを作成し、アセスメントに臨む。学校再開後3年目となり、教員の児童・生徒の実態把握のスキルが向上し、課題を焦点化できる力が身に付いていると外部専門員から評価を受けた。	A
学期に一回の教材・教具発表会のうち2学期をICT教材限定で実施。	国語・算数（数学）や社会性の学習など認知の学習に偏ることなく、図画工作（美術）、保健体育、音楽など幅広くICT教材を活用するなど、教材教具発表会を実施することで全教員がICTの活用が進んでいる。	A

読書活動の充実	読書活動推進委員会を中心に、図書室の整備、蔵書の充実を含め、児童・生徒の図書室の利用を促進させた。読書週間を設定し、終業式で表彰するなど児童・生徒が図書室を利用したいという意欲を促すことができた。	A
---------	--	---

(3) 【進路指導】

小学部・中学部設置校に再編された本校は、高等部時に進学する都立八王子西特別支援学校との連携が不可欠である。都立八王子西特別支援学校主催の保護者向け進路研修会の実施を今年度も継続して行い、加えて本校独自の保護者向け進路研修会を実施した。第1回は夏季休業中に進路先となり得る就労移行支援事業所や生活介護施設等の保護者見学を実施し、第2回は療育の立場から進路を考える機会として本校外部専門員株式会社TASUCの増子拓真氏に御講演をいただいた。

取組目標	取組結果	自己評価
保護者ニーズに対応した進路保護者会の実施。	都立八王子西特別支援学校と連携し、八王子西特支の進路指導主幹による高等部卒業後の進路先についてと、進路先が決定するまでの流れについての2回の保護者研修会に本校の保護者も参加した。組織連携として、今後も継続して参加できるようにする。	A
小学部高学年からの職場見学の実施	小学部5年生が校内の給食調理員、用務主事、校長の仕事を見学したり、インタビューをまとめて掲示物を作成したりするなど仕事に取り組む態度について学習することができた。6年生は近くの公共施設（警察署）の見学を実施した。	A
保護者のニーズに対応した保護者会、説明会の実施	都立八王子西特別支援学校と連携した事業所説明会に保護者が参加できるよう案内を行った。参加できない保護者に対しても情報提供できるように、事業所から配布されたリーフレットを本校PTA控室前に閲覧できるよう陳列した。	A
生活年齢や発達年齢を考慮しながら、児童・生徒に身に付けさせたい力を的確に把握した指導	社会性の学習、作業学習だけでなく、国語・算数（数学）など認知の学習や学習活動全般で、挨拶、報告・連絡・相談等の社会で身に付けるべき力を活動内容に取り入れ、指導を継続的に行うことができた。	A

(4) 【生活指導】

保護者の方が安心して自身の子供を送り出せると学校を信頼していただけてこそ、より良い教育が提供できると考えるので、今年度も安心・安全な学校生活を送ることができる生活指導に尽力した。生活年齢を加味した規範意識の醸成は、学校教育全般において指導した。また、災害時の立ち居振る舞いや避難の方法について、年11回の実効的な避難訓練を繰り返し児童・生徒への定着に

取り組んだ。

中学部1年生を対象とした一泊二日宿泊防災訓練を昨年度に引き続き実施した。基本的な感染対策を遵守する中で学年の生徒全員が参加する訓練を完遂できた。

取組目標	取組結果	自己評価
スクールバスの安全な運行	運行中の市民との接触事故が今年度1件起きたが乗車中の児童・生徒にけがはなかった。その他はトラブルなく1年間運行することができた。接触事故についてはバス会社が運転手の嚴重注意及び再発防止研修を実施した。	B
規律性や社会性を養う挨拶の励行	校長が朝と帰りに児童・生徒昇降口に立ち、挨拶を行った。上級生が挨拶する様子を見て、新一年生も挨拶をする様子が見られた。また、挨拶を繰り返す中で、徐々に頭を下げるしぐさができるようになってきた児童も多くいた。	A
一人通学の推進	児童・生徒の実態に即し、小3の児童のスクールバス停までの一人通学が完成するなど、一人通学が可能な児童・生徒の一人通学に取り組むことができた。	A
実効性のある避難訓練の実施	火災と地震、Jアラートを想定しての避難訓練をすべて計画通り実施できた。防災教育推進委員会と当該月の避難訓練日を合わせ、委員に避難訓練の助言を受けることができた。	A
不審者対応訓練、セーフティ教室の実施	警察と連携し、不審者が侵入してきた際の教員の動きを確認し、警察から助言を受けることができた。おおむね好評価をいただいた。セーフティ教室は、昨年度に引き続き「NPO法人 体験型安全教育支援機構」の職員を講師に招き、学年を基本に4グループに分け、生活年齢を意識した講演を聞くことができた。	A
地域と連携した宿泊防災訓練の実施	地域自治会の方に訓練の様子を見学し、担架づくりに参加していただいた。自治会長と連携して3年目なので、学校の取組についてとても協力的に関わっていただくことができた。計画通り実施できた。	A
ヒヤリハット、事故等について管理職まで即報告があがる体制づくり	事象が発生した後に、学部主任から副校長、校長に即報告が上がり、管理職から時機を逸さず指示できた。	A

(5) 【特別活動・その他】

今年度、新型コロナウイルス感染症に関しては、年間を通して感染者がいなかった。インフルエンザについては、令和6年12月が最も感染者が多く、冬季休業を挟んで一気に収束した。その後

年度末まで感染者はほとんどなく、学校生活を送らせることができた。今年度も学級閉鎖等の措置は取らず、学校で発熱した場合は、当該児童・生徒の保護者に迎えと通院を依頼した。

予定していた学校行事は全て行うことができた。今年度も昨年度に引き続き、PTA主催で給食試食会を実施した。栄養士が直接保護者に給食の調理現場の調理の様子、調理の流れについて説明する機会をもてたことは、学校の情報発信の一環として良い取組となった。

取組目標	取組結果	自己評価
自主性を高める行事の計画・実施	計画していた行事は予定通り実施できた。保護者に参観していただく行事について申込制にして人数制限をなくした。	A
全校研究テーマ「伝わる喜びを伝える意欲へーコミュニケーション力を高める言葉の指導」を設定し、グループ研究を行う。	学校再開後初めて学校縦割りの教員グループを構成し研究を進めた。8グループの進行管理を今年度5人になった主幹教諭に任せ、進捗状況を管理させた。2月の公開研究会に向けて指導方法を振り返り、	A
学校保健委員会の開催（年2回）	2回とも対面で実施した。	A
歯科衛生士等と連携した歯科保健指導の実施	対象学年すべて実施できた。コロナ禍には中止していた、染だしの取組も再開し内容を深めることができた。	A
本校の教育活動の情報発信	ホームページの掲載内容について、学校評価で保護者から更新回数を増やしてほしい旨の御意見をいただいた。技術が必要なホームページの整理について追いついていない状況があるが、古くなった情報が更新されないまま閲覧できる状況だけは避けること、「学校日記」という項目の中で児童・生徒の学校生活の様子を個人情報に最大限配慮しながら更新できた。	B
教職員のライフ・ワーク・バランス（学校閉庁日5日、定時退庁日：各学部10日）	目標通り設定し実施した。	A

2 令和7年度に向けての課題と対策

来年度は児童・生徒数が増加するが、児童・生徒全員の抽出型アセスメントの実施は継続し、きめ細やかな児童・生徒の実態把握と課題解決に向けた教員と外部専門員との連携を密に図っていく。

- (1) 学校の教育目標である「生活に生かせる学力を身に付ける」ことに焦点を当て、国語・算数（数学）の認知の学習の中で高等部、卒業後につなげる力を考えるグループ研究を行う。
- (2) 都立八王子西特別支援学校との連携を維持し、本校の進路指導の取組を充実させる。
- (3) 発達年齢だけでなく生活年齢を考慮した学年相応の指導を徹底するなど、教職員の人權感覚の育成と指導の手順等を説明できる根拠に基づく指導を行う。
- (4) 児童・生徒に良い授業を提供すること、良い授業が提供できる教員を育成することを実現するため、外部専門員と連携した授業改善システムを維持する。
- (5) 特別支援教育コーディネーターを中心に特別支援教育のセンター的機能における八王子市内の幼稚園、保育園、市立小・中学校への巡回相談、出前授業、研修会等を実施する中で、特別支援教育を担える人材の育成に貢献する。